

# 平成十七年度第十五回全国読書作文コンクール

## 小学生の部 大賞

ぜったい夢をかなえたい

高橋 雅

めんどりのイブサクは、にわとり小屋にいるときから、アカシアの木をながめながら、タマゴをだいて、ひよこを育てるといふ夢をいっていました。それは、マガモの旅人さんに命を助けられてから、現実のものになりました。

とつぜん見つけたタマゴをあたためて、かえして育てたマガモのチョロンモリが、北の国へ旅立った日に、アカシアを見ながら、イブサクも、助けたイタチの子どもに、くびをかまれて、旅立ってしまいました。

親が親を、親が子を、子が親をにくしみ、殺しあっていて、世の中がくるってしまっています。そんな中、自分が生んだタマゴでもないのに、そのタマゴをあたためてかえし、イタチからのがれながらも、育てたイブサクは、りっぱで、すばらしい母親でした。最後は、かわいそうだったけど、イブサクは、タマゴをうむだけの、めんどりより、夢がかなえ

られたので、とてもしあわせだったと思います。

わたしも、イブサクのように、ちいさいときから、夢をいだって生きています。わたしの夢は、お医者さんになることです。

わたしの親が、とつぜん、しょうがい者になってしまい、病院へ行くことも出来なくなり、かといって、おうしんに来てくれるお医者さんがいないという、悲しい現実にはたえなければならなくなりました。

わたしが、お医者さんになったら、親のように困っているかん者さんを助けてあげたいです。

この本と出会ったことに感謝し、今の気持ちをずっと忘れずに、夢にむかってがんばろうと思います。

そして、ぜったいに夢をかなえたいです。

## 小学生の部・最優秀賞(小四)

ウィリーの勇気 犬ぞりの少年を読んで

川澄 広稀

「がんばれウィリー、がんばれサーチライト。」ぼくは、一生けん命心の中で応援していた。どきどきしていた。勝てるかもしれない。

犬ぞりレースの日、サーチライトはスタートから飛び出して、トップを走りだす。しかしゴール直前でサーチライトがたおれた。ぼくはこのまま優勝できると思っていたのでビックリした。なみだが出てきた。ウィリー達の必死な思いがぼくにも伝わってきていたからだ。ストーンフォックスも同じにちがいない。だから自分もそして他の人達にも、ゴールさせずにウィリーとサーチライトがゴールするのを、応援したんだ。

「そうしたいと思うだけでなく、かならずそうするという意志が大事だ。」と言うおじいさんの言葉を信じてウィリーは、たくさん事ができた。ぼくは、ソフトボールのチームに入っている。試合が近くなると日記に「試合でぼくは、センターにヒットを打つ。」「ファーストからセカンドへとつるいする。」などと書く。これはお母さんに、自分の希望を日記に書くのではなくて、そうしている自分を書くように言われたためだ。

お母さんが言うには「なりたい自分」ではなく「なっている自分」を書くことが大事らしい。そうなるためにはどうすればよいかを考えるようになる。素ぶりの回数も増やす。いい結果が出たら自信もつく。次もよーしががんばろうと思う。おじいさんの言葉も同じだなと感じた。強く思う気持ちが大事なのだ。その言葉がウィリーに勇気を与えた。

ウィリーは全財産をかけて犬ぞりレースに出場することにした。優勝できなかったらすべてなくしてしまうのにこわくなかったのだろうか。ウィリーは優勝しておじいさんと農場を助けることしか頭になかった。負けることなんて考えてなかった。サーチライトはウィリーと生まれた時からの友達であり家族だった。ウィリーの気持ちをよくわかっていて。ウィリーの勇気ある行動に協力してくれた。レースの時も最後の力をふりしぼって、ウィリーを優勝させようとした。ぼくは、ウィリーの勇気とサーチライトの最後の力、そしてストーンフォックスのやさしさに感動した。

ウィリーは自分の決心を口に出してまわりの人に知らせることで、強くなった。いままで、ぼくは人に決心を言うことははずかしいことだと思っていた。できなければかっこ悪いと思って口に出すことはなかった。でもウィリーの勇気はかっこよかった。ぼくも次のソフトボールの試合には目標とするプレイを口に出してのぞんでみようと思う。有言実行だ。

小学生の部・最優秀賞(小五)

『秘密の道をぬけて』を読んで

手島 やまと

ぼくがこの本を読もうと思ったのは、「秘密」という題名がおもしろそう  
で、わくわくしたからです。でも、この作品の「秘密」とは、昔、ア  
メリカで奴隷制度が認められていた時代の、ある出来事をえがいた、重  
いテーマのものでした。

ぼくは、高学年にはなってから、新聞やテレビで見えるいろいろなニ  
ースについて、家族で調べてみたりするようになりました。すると、今、  
海外で起こっているテロや争いなどの原因が、どれも、とても古い時代  
から続く、民族の習慣や、人種のちがいによる差別などからきているこ  
とが分かってきました。

ですが、この本を読むまで、奴隷制度というものが、人に本を読む事  
を禁じたり、人を動物のようにムチでたたいたり売買するような、これ  
ほど残酷な事だとは知りませんでした。

みな同じ人間同士なのに、なぜこのような奴隷制度が正しい法律とし  
て認められていたのか、理解できません。ですが、その時代の多くの人

たちにとっては、法律で認められたごく普通のことだったのでしょ

う事は、とても勇気のいる、難しい事だと思います。けれど、この本に  
出てくる、アマンダという少女のお父さんは、奴隷制度の時代でも、人  
間はみな平等なのだという事をちゃんと考える事のできる人でした。自  
分や家族の身も危険であるにもかかわらず、奴隷の一家を自由の国カナ  
ダへと逃亡させる「地下鉄道」に参加していたのです。

奴隷の一家をかくまううちに、アマンダは黒い肌の女の子ハンナと友  
達になり、家族で力を合わせハンナ一家の逃亡を助けるのです。そして、  
最後の別れの時、アマンダは宝物の人形、コイ・ヨックスをハンナに  
渡したのです。本当に大切にしていた人形を渡したのは、アマンダが、  
自分の代わりにコイ・ヨックスに、ハンナを守ってほしかったのでは  
ないでしょうか。本当に心の底からハンナを助けたかったのだと思いま  
す。

一年後、ハンナからアマンダに届いた手紙には、ハンナが夢見ていた  
とおりに「ハンナ・カナダ」になれた事が書いてありました。大好きな  
アマンダにこの事を報告できたハンナも、手紙を読んだアマンダも、き  
つととても幸せだったと思います。そして、遠く離れていても、二人の  
心は強く結ばれているようで、ぼくも、とてもうれしくなりました。

今、ぼくの国には奴隷はいません。みんな自由に見えます。でも、気

づかない所に、まちがった考えや行いは、たくさんあるのかもしれない。ぼくは、この本に出てくるアマンダ一家のように、色々な物事をし

っかり見つめ何が正しいか考え行動していきたいと思います。

## 小学生の部・最優秀賞(小六)

それぞれの旅を読んで

樋上 昂佑

ぼくは、この本のように、主人公がいろいろな人達の力を借りて、一人旅をするような話が大好きです。

そこでぼくが考えたことは、もしぼくがこの本の主人公、空君みたいに家出(一人旅)をするならどうするかということでした。

まず、ぼくなら家出を実行するずっと前から(家出)の計画をしておきます。空君のようにどこに行くとか、寝るときはどうするとか、困らないようにするためです。

計画の内容はまず持ち物からです。大切なのは、やはり食料です。まず、インスタントラーメン。次に米を家にある半分の量だけ。あと、くさりにくい物をいくつか持って行きます。飲み物は、初めのうちは水と二本のお茶がまんし、無くなったら公園などの水道水などを飲みます。次は、移動方法です。移動は自転車で行います。タイヤの空気がなくなつた時のために、少し重いけれど空気入れを持っていきます。そして、次に大事な寝る場所ですが、できるだけ人目のつかない場所で寝ぶ

くろを使って寝ます。朝は、できるだけ早起きして、次の寝場所を探し

そのようにして、その苦しさを乗り越えていきたいと思えます。

ます。最後は、料理を作るための道具です。まずお米を炊けて洗うこともできる飯ごう、そして火をつけるマツチに木。あとインスタントラーメンのお湯を作るのに必要な小さなヤカン。そして最後に、はし、スプーン、フォーク、皿などの食器。これがぼくの考えた家出の計画です。

ちなみにお金は、銀行からも全て引き出し、自分のお金を全部持って家出します。そしてぼくが向かう場所は、十津川村です。なぜならば、十津川村はぼくの住む奈良県で一番おもしろそうな場所だからです。そして、なぜ県内かと言うと、いざ帰る時に帰りやすいからです。あと、十津川村へ行く本当の理由は、十津川温泉に入りたいからです。

こんなことをして、奈良県を見て回りたいと思います。そして、お金が無くなったら家へ帰ります。こんな家出をぼくはしたいです。家へ帰ったらまず、この家出で何を学んだか、何を知ったかを考えます。こうして、ぼくの家出は終わります。

次にぼくがこの本を読んで一番感動したところについてです。ぼくがこの本を読んで一番感動したのは、やはり、いろいろな人達との出会いです。たくさんの人達と出会い、自分を考えていく空君。そんな場面に、ぼくは心をひかれました。

ぼくもそのうち空君のようなことになるかもしれませんが。しかし、そんな時は自分の過去を振り返って、自分を見つめ直し、悪い所は反省し、

「ジェイミーが消えた庭」を読んで

岡本 彩

この本を初めて見たとき、私は表紙と題名から、家出の話かな、などと推測してしまった。けれど、全くの見当違いだった。ページをめくった瞬間、場面は暗闇で、「ぼく」と相棒の「ジェイミー」は「クリーピング」をしていて、「マル住」など知らない言葉をたくさん使っていた。とても新鮮だったが、見ず知らずの土地にいきなり放り出されたような気分になってしまった。私と同じ十四歳なのに「何をしているんだあ」と思わず叫び出したくなってしまった。

そんな私の混乱も徐々におさまり、続きを読んでいく。最後まで読み終えたとき、私が強く感じたものは、「人の感情」についてだった。

「友情」という言葉について改めて考えてみる。よく目にしたり、聞いたりする言葉だ。だからといって、実際に目に見えるものでもないし、このくらい、とはがることができないものでもない。とても曖昧な言葉だ。けれど、目に見えなくても「ぼく」と「ジェイミー」との間には「友情」があったと思う。そうでないと、原因は自分にあるとはいえず、「ジェ

イミー」を助ける為に「ぼく」が上級生の女の子の家までたのみに行くことはできなかったと思うからだ。きっと「ぼく」は、少しでも早く、友達として「相棒」として側にいて一緒に遊びたかったのだろう。「ジェイミー」が死んだ後、フィルに復讐し、一度失敗した、「ダーウエント・ドライブ」を「クリーピング」したのも、「ぼく」が償いも含めて、「ジェイミー」とのつながりを残しておきたかったからとも考えられる。

私がこの本で感じた「友情」は、底には強い絆があるのに、不安定なものだった。それはやはり、「十四歳」だからではないだろうか。このくらの年齢は私も含めて、やはり一番多くのこと悩む時期だと思う。大人以上に「ぼく」は悩んでいるように思う。悩むから、今自分がなくてはいけないことができず、後悔してしまう。だから、不安定でも、いものように思えてしまうのだろう。私は、悩みはあまりないが、後悔したことは何十回もあるのではなんとなく理解できる。

そして、「死」についても。誰にだっていつかは訪れる。実感こそ全くわかないが、私にも訪れるものだ。「ぼく」にとって「ジェイミー」の「死」は衝撃だっただろう。私がこの立場だったら、泣くどころか、狂ってしまいかねないと思う。

「死」とはいったい何なのだろう。単純に息が止まり、生活しなくなることなのだろうか。そう考えると、「ジェイミー」は間違いなく死んでしまっている。

中学生の部・最優秀賞(中一)

スグリ　　～もののけ祭り～

櫻庭　叶恵

けれど、遣された「ぼく」や家族や他の友達の思い出の中では生きていると思う。以前、「死んでしまった人は、生きている人の思い出の中でしか生きられない」というような文を読んだことがある様な気がする。そして、この物語の、「ぼく」のもとに「ジェイミー」がよみがえる場面を読んで実感した。私の自分勝手な解釈のだが、「ぼく」は「ジェイミー」のことが大切で、同じように「ジェイミー」も「ぼく」のことが大切だったから、あるとき、「ぼく」には「ジェイミー」が見えたのだと思う。私達は生きている。だから、「死」がどういふものかは分からない。けれど、「誰からも忘れられてしまうこと」「一つの「死」ではないのだろうか。そして、それは、とても寂しいことだと思う。

「友情」と「死」。この関係なさそうな二つのものが、この本ではつながっている。当たり前のことかもしれないが、どちらも人の思いや感情がないと意味を持たなくなってしまうものだ。「ぼく」の視点でえがかれているこの本は、「ぼく」の微妙な気持ちがとても伝わってきた。

人には感情がある。だから、ささいなことに喜んだり、悲しんだりできるのだ。そんな小さな当たり前だけれど大切なことを知ることができた。

「ジェイミー」の黒い服を埋めた「ぼく」は、もう「クリーピング」はしないだろう。けれど、思い出は忘れないだろう。私も大切な幼い頃の思い出を忘れずに生きていきたいと思った。

私は、架空の世界を頭の中に作り上げる事が好きだ。それは、思い通りに行かない現実からの逃避と、自分の心を救う為に常にくり返されている。「もののけ祭り」、不思議な世界に引き込まれていった。

物語は、楽しい祭りの夜から一変、幼い姉妹が両親と死別する場面から始まる。両親と交わした「巫女になる」という約束が、その後の二人の大きな力となり、支えになった。

修行は厳しく、才能がなければ途中で挫折してしまうと覚悟を問われた部分に、今までの自分を重ねてみた。少しばかりの努力に対して（自分は才能がない）と悲観し、あきらめ、何かのせいにして落ち込んでいた。また、家族がいて、周囲の人がいて、色々な事が自分を守り、経験させてくれる事が当たり前である。支えられている事に甘えている自分が見えてきた。

孤独感の中で、狂気に迷い込みそうになるスグリを助け、支えになってくれたものは、両親の小さな骨のカケラではなく、温かい生きている

子犬だった。危機一髪のところスグリに救われた小犬。運命や出会いに必ず意味があるとしたら誰かが自分の為に、自分は誰かの為に、役に立つという事なのだろうか。私はどんな役に立てるのだろうか。

スグリの父は静かで学究的な性格である事から、父親の帝から気弱だと思われていた。父スバルと、母小白は、劣悪な鬼の世界へ駆け落ちし、生まれたのがスグリだ。劣悪な鬼の世界とは、私達が住む社会を指しているように思えた。

神秘的でかつ不思議なものけの世界では、「自然に生まれ、自然に還る。闇に生まれ、闇に還る」不便な生活であっても自然を守る事を何よりも大切にしていた。反面、劣悪な鬼の世界とは、便利な生活をする為に、多くの自然を取り返しのつかない程破壊し続けている下界の国。確かに私達の名前に、山、川、谷、木、海など、多くの自然が使われ、依存して生活しているのに、自然を大切にする意識が薄い事にハッと気づかされた。自然界から見れば、人間は鬼なのかもしれない。

スグリは、父と母から多くの事を学んだ。その知恵は、たった一人で生き抜く為の力となり、武器となった。両親から託された知恵は、スグリ自身の身を守り、多くの人を助け、多くの人に認められ、帝の心を開き、両親の願いと母の遺言をかなえた。

今まで私は（何の為に勉強するのだろうか）（これは、何の役に立つのだろうか）と、思う時があった。それは単に自分が知らない事だから学ぶの

だと気が付いた。いつ、何の為に役に立つのかと言う事より、自分自身の力となり、武器になるとしたら、おろそかには出来ない。

親から子へ、子から孫へと伝えられる知恵、自分の経験から学ぶ知恵、学校や社会から学ぶ知恵。どれも無駄ではなく、意味のある大切なものだ。それら全てが、人との出会いや関わりをもつ事から生まれ、つながる。

しかし、知恵と才能を持つことで、スグリは人から妬まれ、危険な目にもあった。「人をうらやむことで、自分を見失う」私にも心あたりがあった。

（なぜあの人だけが認められるのだろうか、私も同じにやっているのに）不満が憎しみになり、やがて失望に変わる。

心が狭い。良い所も悪い所も、その人の個性。その個性を伸ばし、自分の居場所を築く事が大切なのだと言われても、素直に聞き入れられるようになるには、まだ時間が必要だ。自分も同じ努力をしていると思いついて、人は皆同じではないのだから、同じ努力という事は有り得ないのだ。

負けたくない、自分を認めてもらいたいという思いが、勝手に同じ才能を持つ者同志として相手を見てしまう。

自分は一人、自分以外は全てがライバルと思えば、果てしないストレスである。しかし、自分以外の全ての人を知恵を与えてくれる協力者と



なる存在かも知れないと考えると、人との関わりや出会いを大切に、素直に受け入れる努力もしなければいけないと思う。

スグリの勇気や優しさは、両親から得た知恵から成り立ち、その知恵がスグリの世界を変えていった。

私も、現実の中で自分の心と戦いながら、少しずつでも人との関わりの中から知恵を身につけ、自分の居場所を築けるように信念を持ち、努力して行かなければと思った。

## 中学生の部・最優秀賞(中二)

### ぼくたちの生きる理由

大和 涼子

人は、オギャーと生まれ、そして死に向かって一歩ずつ進んでゆく。生まれ出た時の苦しみ、痛み、怖さは何一つ覚えていないのに、死を直面にする時は、とても苦しく、痛く、それゆえに一人で死んでゆく事にとっても恐怖を感じるのではないかと私は思っていました。

しかし、この本を読んでいくうちに、人それぞれ死をどう捕らえているかによって、その感じ方が違う事に気付きました。おびえながら死んでいく人。悔やみながら死んでいく人。一言もいわずに死んでいく人。ただ単に病魔に負け、その痛みだけを口にして死んでいく人。その反対に、苦しみや痛みをこらえ、皆に感謝して、一生を終えようとする人。主人公の小澤竹俊医師を中心に多くの死が描かれ、当たり前前の命がこんなに大切なものであり、こんなに考えさせられるものなのだと、今さらながら思い知らされた気がします。

この横浜甞生病院ホスピス病棟とは、他の病院や医師からもうこれ以上治療することが難しいと、見放された患者ばかりが入院している所で、

少しでも長く生かすガンセンターの積極的な治療法ではなく、患者を一人の人間として、患者自身の意見や考え方を尊重させ、人間が人間らしく最期を迎えさせる場所だという事です。病気を治療する人のための医療は病院で行うということと同じように、病気が治療できない人のための医療はホスピスで行うということと同じように、病気が治療できない人のための医療はホスピスで行うという事も重要視されなければいけないと思いました。

又、患者を中心にその家族、医師、そして看護師とこの四つのつながりがとても大切なものであって、それらの鎖が一つでもほどけたり、絡んだりすれば、相手に対する信頼感や、安心感が全く無くなり、キュア（治療）とケア（配慮）の関係も無意味なものになってしまう事がよくわかりました。「他の病院では入院できないガンの難民がここに送られてくる。ここ、つまりホスピスは、そういう患者を受け入れる、医療現場のゴミ箱だと考えられているのだ。」という小澤医師のするどい表現に、私はハッと胸さすものを感じました。それは、ホスピスに来る患者全てが死を前向きに受け入れているわけでも無く、やはり、どうにかして生きたい、生きていたいと叫びながら亡くなっていく人もいるのです。命が限られているという事を知りながら自分自身も、まわりの人たちも何も出来ないでいます。死んでしまったらハイそれで終わり。ゲームみたいにもう一度リセットしてなんて、とんでもない話。だからこそ人は死を恐れ、そんな人たちの中に、このホスピスに入りたくないのに、入ら

ざるを得ない、ホスピスを人生の終着駅と認識している為に、ゴミ箱扱いされてしまうのだと思いました。いやそうではなく、このホスピスこそが再び「死から生」へとつながるかけ橋なんだ。たとえ一日でも、一時間でも、一秒でも、生きていられたら、生かされていたら、ありがたく皆に感謝しようと思付いた者が、人としては幸せではないだろうか、私はそう思いました。

この本に登場する、横溝清一さんという患者は、自分がガンで助からないのがわかっていてよく取材に応じられたものです。自分の生き方や死に方を本に書かれたらいやではないのかと、最初は単純に考えていました。

しかし、読み終えた後、全く違う感想を持ちました。それは、死をテーマにしているが実際は生きることを考えさせる為に書かれた本だという事。又、「生きること」とは、人と人とのつながりや本当の幸せとは何かという事を再び考えさせられる事だと思いました。ガン患者、横溝さんの言葉の中で、「かたちあるものがすべてで、人と比較することで、自分を値踏みして、他人と比べて喜んだり落ちこんだり。昔、弱さなんて、恥だと思っていた。でも、もつともつと早く、自分の弱さを受け入れる事、弱さを認める事を、学んでいればよかつたなあ。病気なんかから学ぶんじゃなくてさ。」という一節が、とても印象に残りました。きっと、誰でもが他の人と比べ合ったり、競い合ったりして勝つただの、負けた

中学生の部・最優秀賞(中三)

だのと言っています。もう少し自分の弱い所や悪い所をよく見つめ直す事ができたら、他の人の弱点や欠点も苦にならず、もつと周りの人に対して、幸せを分かち合えたり、喜びも共同に感じ合えたのではないかと、言いたかったのだと思います。私は、死を直前にして出たこの言葉が、とても好きになりました。

今、私は健康であり、何一つとして不自由はありません。もし自分が助からない病気になった時、何を考え、どう行動するか、じっくり考えなければいけないと気付かされました。命、かけがえのない命。この命を大切に一步一步前進していこうと思っています。

悲しみを糧に生きていく

鈴木 侑磨

生きる、死ぬという事はどういう事なのだろうか。

この本を読んで、僕はその意味をつくづく思い知らされるとともに、毎日をなんともつたない過ごし方をしているのだろうか、と実感させられた。僕もそうなんだけど、いやな事や、めんどくさい事をやるうとすると、脳が拒絶して体が動かないんだ。人間というものはそんなもんだと思う。いくら知能が発達してもこれだけはどうにもならないのだろう。だから今の若者はどんどんめんどうくさがりになってなにもなくなってきたるんだと思う。

それに、生と死という言葉は人間にとって神聖な言葉で、あまり口にされないような言葉のはずなのに、このごろなにかと気に入らない事があるとなぐに相手に「死ぬ。」とか「殺すぞ。」とかいう人がいる。きつと過激な映画やマンガの影響もあるのだろう。その人たちの中ではそれを言う事が口ぐせになっているのかもしれないが、とてもひどい事を言っているんだ。病気や事故で死んでいる人もいるのにそんな事を言っ

いいいのか？

一年半ほど前に、僕の祖母も病気で亡くなった。その時とても悲しかったし、もつと優しくしてあげればよかったと思った。そのあと僕はたまにこんな事を考えるようになった。急に死んでしまうより告知をされたほうがいいのではないか。そうすれば、僕たちもそれまで優しくしてあげられるし、なにより告知の期間を過ぎても大丈夫な状態だったら、これからも生きていけるんだ、という自信が生まれるのではないかと思っていたからだ。

しかしそれは間違っていた。僕はその場合、祖母がひどく心を痛める事を忘れていた。死亡時期を告知されたらどんなに辛いか、それに、その期間以上生きてとしても希望ではなく、これまで大丈夫だったけど、これから一日後、いや一時間後にも私は死んでしまうのではないか、という恐怖や絶望や苦しみが生まれてしまうのではないかと思えたのだ。それに、亡くなるまでの間だけ優しくするというのはどうなのだろうか？それで本当によいのだろうか？そんな事をしてもなにか偽りの優しさになってしまうのではないか。そうではなくその人が亡くなってからも、たまには線香をあげにいたりして愛さなければならぬのだ。と僕は気付いた。僕がいままで祖母に優しく育ててもらっていた分を、祖母が生きている時に恩返しできなかった分を、これから祖父や亡くなった祖母に返していかなければならない、と僕は思う。

これから年がたつていく中で、このままいくと祖父や父方の祖母が亡くなり、次には父母が亡くなるだろう。その中で僕はちゃんと生きていけるのだろうか？最後には僕一人になってしまふのだろう。でもそれでも精一杯がんばっていけるのが人間なのだろう。人間だからこそ、辛い事も乗り越えて生きていけるのだ。そのために人間は生まれてきたのだろう。

思い返してみると、僕の母もそうだった。祖母が亡くなって半年ぐらの間は、あの元気な母が火の消えたように静かで少し心配になったほどだった。しかし、何かさとしたかのように介護の勉強を始め、今では元気に、

「これが私の天職だ」

とか言いながら、体重百キロ以上のおばあさんや野球が大好きなおじいさんの所に行つて働いている。きつと悲しみを乗り越え、新しい目標を見つけたのだと思う。

僕の生きる理由は、ともし聞かれたら、一日一日を一生懸命、くいのない様になんて、カッコいい事は言えないけど、とにかく正直に日々を大事に生きていきたいと思う。

またセミがうるさくなくはじめた。今日も暑くなるのだろう。さあ気合いを入れてテスト勉強がんばって、来年は自分が行きたかった高校に行けるようにするぞ。